



## 総題 「ローマの信徒への手紙」における 贖い

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教材部

### 第 6 課 信仰を詳述する 村沢 秀和 2010, 7, 31~2010, 8, 6

〈詳述する…くわしく説明して明らかにする、<sup>と</sup>解き<sup>あ</sup>明かす〉

#### 1. このように、義とされたのだから 8月1日(日曜日)

ローマ5:1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、5:2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。5:3そればかりでなく、苦難をも誇りとし、わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、5:4忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。5:5希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

わたしたちは、神様の恵みを信じる信仰によって義とされました。その結果、神様との間に平和が与えられました(ローマ5:1)。これが救われたということです。もし、神様との間に平和がなければいつも緊張し、自分は救われるのだろうか心配する毎日だったことでしょう。しかし、心配いりません。信仰によって平和が与えられているからです。さらに神様との間に平和を得ているものは、神様の栄光にあずかる、すなわち神様にお会いできる希望が与えられています(ローマ5:2)。この希望は苦難や試練の中でさらに大きくなっていきます。わたしたちは苦難の中で希望を失うことはありません。なぜなら、神様の愛がその苦難の中にさえ注がれていることを知っているからです(ローマ5:3~5)。

#### 2. 人を求められる神 8月2日(月曜日)

5:6実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。5:7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。5:8しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

元ヤクザだった人が、このローマ5:6~8のみ言葉が一番好きだと言っていました。自分が悪いことばかりをしていたとき、キリストはそんな自分のために死んでくださった。彼はそこに神の愛を見たのでした。わたしたちは律法を守って良い人になったから、神様がわたしたちを愛してくださるのではありません。律法を守れても守れなくても、良い人であっても悪い人であっても、神様は愛してくださるのです。

以前、マラソンランナーの有森選手がオリンピックで銀メダルをとった時に、「自分で自分をほめてあげたい」と言って、それが流行語となったことがありました。「自分で自分をほめてあげたい」。普段から自分に厳しく、ほめてもらうにはふさわしくない、まだだめだ、だめだと思っただけでがんばっていたのでしょ。だからメダルをとったとき、やっと少しか自分許してもいいかもと、心が解放されたのだと思います。

多くの人がこの有森選手の言葉に共感したのは、自分に厳しく生きている人がそれだけ大勢いるということなのかもしれません。しかし、こういう生き方って辛いと思いませんか。神様は誰からもほめてもらえないような、あるいは自分で自分を許すことができないような、そん

な状態であっても、わたしたちを許し、ほめ、愛してくださっているのです。これを知ったとき、どれだけ多くの方が重荷から解放されることでしょうか。そして、パウロは、「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです」（ローマ5:10）と続けます。救いの確信は、神様の愛をどこまでも、どこまでも深く知ることなのだと思います。

### 3. 死はのみこまれた 8月3日（火曜日）

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」5:12

一人の人によって罪が世に入ったと書かれてあります。この一人の人とはアダムのことを指しています。その罪によって死が入り込みました。死はすべての人に及びました。なぜなら、すべての人が罪を犯したからです。だから、死の問題を解決するには、この罪の問題を解決しなければならなくなりました。

### 4. 律法は必要を喚起する 8月4日（水曜日）〈喚起する…よびおこす〉

「律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです」5:13

人間に律法が与えられたのは、罪が何であるかを知るためでした。ところが、その律法を守ろうとしても守れないのです。そのことによって、自分は罪人なのだと悟ります。自分の罪を知ることは辛いことです。しかし、これは大切なことなのです。自分が罪人であることを知らなければ、キリストの救いの必要もわからないからです。律法によって罪の自覚が生じ、それによってわたしたちはキリストのもとへ行こうと決心するのです。罪の自覚が、神様との出会い、赦される喜び、救いの恵み、永遠の命の希望へと導くのです。普通、神様を知らなければ、罪の自覚には何の喜びもなく、むしろ苦しいだけです。そう考えると、何と不思議なことだろうと思います。

### 5. 第二のアダム 8月5日（木曜日）

「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」5:19

ただ一人のアダムのせいで、罪が入り込み、人はみんな死ななければならなくなりました。アダムさえ罪を犯さなければ、わたしたちは死ななくても良かったのに、と思ったことはないでしょうか？ たった一人の人によって多くの人が罪人とされたというのは、納得いかないかもしれません。しかし、だから同じように、ただ一人の人イエス・キリストによって、多くの人が正しいものとされるのです。この理屈はととてもわかりやすいものです。

しかし、パウロはこの救いの理屈に驚くべき説明を加えています。それはローマ5章14節「・・・実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だった」という言葉です。アダムはイエス・キリストを前もって表す者だった、しかも罪を犯すことによって・・・。アダムが罪を犯したからこそ、イエス・キリストは人としてわたしたちの前にお生まれになったのです。だから、アダムはキリストを前もって表していたのだという、このような発想は、目の前にある小さな世界しか見えない人にはとても出てきません。わたしたちは、宇宙的視野で神様と人間との関係をとらえなければならぬのだらうと思います。まさに善と悪との大争闘です。その始まりは天で起きましたが、その戦いの舞台はいまや、地上に移されているのです。